

内面からの帰郷者

『グラスミアの家』における自我の運命

小 口 一 郎

Home at Grasmere は、William Wordsworth が、グラスミアの谷を楽園と見なし、自らの「家」として選ぶに至った決意と経緯を述べた詩である。¹ しかし、主として詩人の状況や風景などの外在的な事象を扱うこの第一の主題と平行して、周囲の何物にも依拠しない、それ自身のみでの存在を標榜する自律的自我が発見されるという、精神の内面に関わる第二の主題が組み込まれている (Garber 184-97)。作品中でワーズワス自身が明言している通り、“the mind of Man”(989)² が彼の詩にとって中核をなす領域なのであれば、精神とは近似した概念である自我の特質を明らかにすることは、この詩人の創作原理を探る上で避けて通れない課題である。本論は、まず第一の主題である楽園回復の行為を分析することによって、二つの対蹠的な精神的志向がこの主題を実現に向かわせる動因となっていることを明らかにし、その上でこれらの志向が作り出す弁証が、自我の発見へと至る内面的展開を可能にしていることを論じる。次にこうした出自故に、ワーズワスの自律的自我が必然的に担うことになった特性と限界を考察し、イギリス・ロマン派の中でのその位置付けを探るものである。

『グラスミアの家』における第一の主題である楽園回復の願望は、十八世紀後半に高まりを見せた「千年王国」(millenium)待望の思想に基づいている。千年王国とは、Satan に対する神の最終的な勝利、最後の審判、そして永遠の天上的至福の回復という、現世の歴史の終わりを告げる一連の出来事が到来する前に、天使が一時的に悪を打ち負かし、千年間という限られた期間この世に実現される、聖書思想上の地上楽園である (Tuveson 223)。Abrams によれば、ワーズワスも含めたイギリス・ロマン派前期の文人達は、アメリカ独立運動、そし

て特にフランス革命という政治上の大事件に遭遇することによって、ユダヤ・キリスト教思想に内在していたこの「千年王国思想」(millenarianism)を確信し、世界と人間が刷新され、失われていた楽園の至福がこの地上で回復されるという強い期待を抱くことになった。その後彼らは、暴力革命によって地上楽園が実現されるという確信を捨て去ることにはなったが、千年王国を待望する思想は内面化されることによって命脈を永らえ、結果としてロマン派の思想は聖書の黙示の思想であり続けることになったのである(56-65)。

この千年王国主義とは、たとえその端緒は特定の場所と時間に限定されるにしても、必然的に全世界へと広がり、結果として全ての人類を巻き込まずにはいない全的革命の思想である(Abrams 62)。ワーズワスがこの思想に従ってグラスミアに地上楽園を見い出そうとした時も、そこで享受される至福、“A portion of the blessedness”(254)は最終的には世界中の人々へ、すなわち“all the Vales of earth and all mankind”(256)へと広げられることが前提とされていた。しかし、この作品の中で支配的な精神の運動の方向は、「全世界の谷間」へという外向きのものではない。むしろ、“Embrace me then, ye Hills, and close me in”(129)という一行が端的に示しているように、ワーズワスはグラスミアという囲われた心地良き場所、つまり母胎的空間の中へ退向したいとする願望に導かれているように見える。これは256行目で表明された千年王国主義とは矛盾を来している。グラスミアという限られた範囲で地上楽園が実現された暁には、その地が全世界変革の基点となることが、ワーズワスの一時的隠遁の前提であるはずだが、むしろ実際にはこの前提が、退向願望を直ちに充足するための口実としてより強く機能しているように思えるのである。

ジャン・セルヴィエはその著書『ユートピアの歴史』の中で、ユートピアと千年王国を対蹠的な性格を持つ文学空間として定義し、各々を支配する願望、ないしは衝動を考察した。ワーズワスの動揺する態度が孕む外向と内向という二つの精神的志向は、このセルヴィエの意味でのユートピアと千年王国に関わる願望や衝動に正確に対応している。セルヴィエは文学史上の様々なユートピアの物語を、現状維持を願う階級の反動的な企てだと考え、抑圧された階級の革命的衝動である千年王国主義の対極に置いた。彼によれば、ユートピアとは、

母胎の平穩の隱喩であるところの伝統的都市の厳格な構造の中に回帰したいという無意識の欲求を、夢の象徴によって表現したものに他ならない。この退向願望を実現させる母胎的空間という基本的性質から、文学史上の様々なユートピアは共通した特徴を持つことになる。それらはいずれも地理的に孤立し、地形的には同心円状の自然の障壁によって守り閉ざされた都市である。開かれているとすれば、川、海、そしてとりわけ湖のような母胎を表す比喩形象の方向のみである。ユートピアの女性像は、同時に処女であり母でもあるよう理想化されており、この女性像を保持するため、肉体を通じての生誕という汚れを喚起する形象や行為は頑に拒否されている。時間的には過去への郷愁に特徴づけられる。これに対して千年王国主義とは、革命によって約束の地を地上に実現し、無際限の幸福を享受しようとする意志である。千年王国主義は父親像に象徴される支配的秩序に挑戦することによって、個人としての自由意志を獲得し、伝統的都市の桎梏から解放されようとする人間の前進的衝動なのである。したがってこの点からすれば、千年王国の対立概念であるユートピアは、自由意志の重荷や、孤独な存在の不安から逃れようとして人間が見る夢ということになるだろう(セルヴィエ 7-19, 259-87)。³

ワーズワスのグラスミアは文学上の典型的なユートピアのような都市ではない。⁴しかし、セルヴィエの論から「ユートピア願望」とも称すべき母胎志向の退向欲望を抽出し、ユートピアをこの願望が受け入れられる空間としてより広く定義し直せば、グラスミアも、ワーズワスのユートピア願望が成就すべき空間という意味で、一種のユートピアと考えることができる。グラスミアに見られる数々のユートピア的要素もこのことを裏付けている。まず、グラスミアは、“divided from the world / As if it were a cave”(824-25)という記述から分かる通り、地理的に外世界から隔絶した場所である。また、この地に至るためのウィリアムと、この作品では Emma という名で呼ばれる妹の Dorothy Wordsworth の旅は、当初その状況が“Bleak season was it, turbulent and bleak, / When hitherward we journeyed . . .”(218-19)とされていることから、反ユートピア的な試練の旅の性格を持つものとして導入されていた。しかし、その後二人を、自然の助力を得て易々と進む“two Ships at sea”(226)に譬える安楽

な航海の比喩が用いられたことは、グラスミアが島の性質を持った楽園であることを意味している。⁵ 旅の比喩一般に言えることだが、特に航海の比喩は夢の世界への参入と同じ意味を持ち(セルヴィエ 267)、この点からもここは退向的な快樂原則の支配する空間であることが示唆される。“Nook”(249)という言葉が意味する奥まった地形的特徴は、グラスミアが“guardian”(131)や“shelter”(132)、つまり庇護者の役割を担うことを可能にしている。周囲を取り囲む自然の障壁は苛酷な外界の条件から住民を守ると同時に、道徳的意味でも墮落や悪を寄せ付けない。

... as these lofty barriers break the force
Of winds — this deep vale as it doth in part
Conceal us from the storm — so here there is
A Power and a protection for the mind. (455-58)

更に、自然がワーズワスを導いて行く方向が“a home / Within a home”(261-62)そして“a love within a love”(263)であることは、グラスミアが同心円構造を持つことを示している。このような地形が母胎を象徴する湖を伴って構成されていることから、グラスミアは巨大な母性的庇護空間であると言えるだろう。

この詩を支配する時間は一見絶対的な現在時制であるかのように思える(Lindenberger 164-66)。しかし、実際はこの地が楽園であるという確信を保証しているのは、過去への郷愁なのである。冒頭に述べられているように、学童だったワーズワスが初めてこの谷を一瞥した時心に湧き上がった高揚感、“a sudden influx”(5)と“What a happy fortune were it here to live?”(9)という確信が楽園性の根拠であったのだから。ユートピアは過去の想起と郷愁にその基盤を置きながら、現在の中に固定されているという時間構造を持つが(セルヴィエ 268-69)、グラスミアはこの点からもユートピアの一変奏であると定義できる。ユートピアを支配する道徳概念である純潔性は、グラスミアにおける性的関係の有り様を規定している。ワーズワス家の女性たちは異性性を剥奪された“Sisters of our hearts”(869)としてしか登場しない。近親相姦すら思わせるウ

ィリアムとドロシーの深い愛情は、グラスミア湖の“a lonely pair / Of milk-white Swans”(322-23)に投影されているが、このつがいはその存在が言及された時点で既に谷から見失われており、性的欲望と性的関係の可能性は、投影された後に排除されるという手続きを通して注意深く回避されていることが読み取れる。以上のように、もともとは楽園をこの地上に実現しようとする千年王国主義的企てであったと考えられるグラスミアへの参入が、逆説的なことに退向的なユートピア願望もまたこの谷を支配する強力な原理であることを暴いてしまったのである。グラスミアは、中心性、完全性、充足性、統一性を標榜すると同時に(“A Centre . . . A Whole without dependence or defect, / Made for itself and happy in itself, / Perfect Contentment, Unity entire” [167-70])、人間の営みを停滞させ停止させる行き止まり、“a termination and a last retreat”(166)でもあったのだ。

しかし、グラスミアはユートピア願望のみに支配された空間ではない。ユートピア願望と同時にこの作品を動機づけている千年王国主義は、楽園の実現は来世や虚構の物語の中ではなく、この地上においてでなければならないことも要請している(Garber 174-84)。楽園であると同時に地上の現実空間であるという前提上の矛盾は、地上にあるが故にこの谷が楽園として不適格なのではないか、あるいはこの地の幸福が本当に自らの掌中に握られているのか、という疑念と(Schulz 86)、その疑念を打ち消そうとする衝動との間にワーズワスを引き裂くことになる。その最も顕著な例は、ウィリアムとドロシーの愛情が投影された白鳥が見失われてしまったエピソードである。白鳥の不在が意識されると、土地の住人が冷酷にもこのつがいを撃ち殺したのではないかという疑いが頭をもたげ、この地の楽園性の確信を保証するはずの住人の無垢な性質を否定してしまう。楽園グラスミアに内在する前提上の矛盾がもたらしたこの事態に対しては、ワーズワスはただ忘却の川 *Lethe* を暗示する、“a pleasant stream”(381)に身を任せ(Harding 113)、意識から追いやる以外に術を持たず、“By such forgetfulness the soul becomes — / Words cannot say how beautiful”(386-87)という嘆息に表された退向願望に訴えざるを得なくなる。楽園を今、ここの現実には置かなければならないという前提が、谷の冷厳な現実をも楽園世界に包含

することを余儀なくさせ、皮肉にもその反動として、更に極端なユートピア願望を引き起こしているのだ。

この種の不安と動揺を解決する術が前提上封じられているのであれば、その結果はこの例のように不安に対する反作用として補償を、時には過剰補償を引き起こすことになる。特に詩の後半部では、千年王国主義的意識が強いる冷酷な現実の認識と、ユートピア願望が要請する理想の樂園像とが拮抗し合い、互いに反動を繰り返している。最終的には、この力動的関係は樂園空間を収縮していく方向に帰結することになるだろう。⁶

特にこの展開は807行目以降に顕著である。まず、“the vast Metropolis”(D: 597)に住み、群衆に埋没して生きる人間の孤独な状況が引き合いに出され、グラスミアの統一的社会が、“The true community, the noblest Frame / Of many into one incorporate”(819-20)と称揚される。この幸福な状況が前提となって、“all Arcadian dreams, / All golden fancies of the golden age”(829-30)などの虚構の理想空間が放棄されることが直言され、その後改めてグラスミアの現実の姿が受容される。

Give entrance to the sober truth; avow
That Nature to this favourite Spot of ours
Yields no exemption, but her awful rights,
Enforces to the utmost and exacts
Her tribute of inevitable pain,
And that the sting is added, man himself
For ever busy to afflict himself. (837-43)

するとすぐさまこの冷厳な認識に対して希望が導入され(“Yet temper this with one sufficient hope” [884])、現実のあからさまな認識を中和する役割を果たすのである。

しかし、不安と確信の力動的関係はいつまでも均衡を保つわけではない。次に、仮定法ではあるが、希望に対する疑いの念が示されると、ユートピアの領域は縮小を始めるのである。

内面からの帰郷者

And if this
 Were not, we have enough within ourselves,
 Enough to fill the present day with joy
 And overspread the future years with hope —
 Our beautiful and quiet home. . . . (859-63)

この引用では、それまでグラスミアの谷全体が担っていた楽園性と、全世界楽園化の起点としての役割を、ワーズワスの親族とその親しい友人たちで構成された家庭が受け継いでいる。谷に与えられていた幸福や自己充足性が、家庭という更に小さく限られた空間に転移されているのだ。一旦はこの収縮志向に対して、外向きの倫理感が反作用の歯止めをかける。

But 'tis not to enjoy, for this alone
 That we exist; no, something must be done.
 I must not walk in unreproved delight
 These narrow bounds and think of nothing more,
 No duty that looks further and no care. (875-79)

しかし、次の瞬間再び反動により意識は内向する。より広い世界に対しての貢献を実現するのは、他ならぬ精神内面の“an internal brightness” (886)であることが発見されるからだ。この光が内面に留まらず外界と関係を結ぶ理由について、ワーズワスは自問を繰り返す。その結果判明したのは、“That humble Roof, embowered among the trees” (893)、そして“*That calm fireside*” (894)という家庭を象徴する二つの形象のどちらも、この問への答えを与えてはくれないという事実であった。皮肉なことに、先程まではグラスミア谷に取って代わる唯一の楽園空間であったはずの家庭ですら、ワーズワスの要求に応じてくれるものではないことが露になってしまったのである。次なる真の理想空間は家庭よりもなお一段と縮小した、ワーズワス自身の内面世界において他にはないであろう。

Possessions have I, wholly, solely mine,
 Something within, which yet is shared by none —

Not even the nearest to me and most dear. (897-99)

ここに至って『グラスミアの家』における精神の運動は、その最終地点に到達した。楽園を目指してグラスミアの谷へやって来たワーズワスは、この地も決して苛酷な状況や墮落の要素から免れてはいないことを経験するに及び、内向と外向の衝動の間で揺れながら、自らの家庭に一旦は理想空間を見いだした。そして、それすらも彼の必要とする全てを備えてはいないという事実を悟り、最後には自分自身の内面に理想の空間を発見したのである。ここにおける周縁から中心へ、同心円状の地形の外側の円から内側の円へと引き籠って行くユートピア願望の成就是、同時にある決定的な瞬間をももたらしている。背景から完全に独立し、最も親しい身内の者ですら触れたことのない精神の核が、この瞬間に明確に意識されたからである。⁷ 本来グラスミアの谷に備わっているはずの充足性と統一性は、家庭という更なる小空間を介して、精神の中心に転移されたのである。それ自身のみで充足し、その存在が全く外界に依拠しないことから、ここで発見された精神の核は自律的自我と呼ばれるに相応しい。

もともとは千年王国主義的企図であったものが、逆にユートピア願望を呼び覚まし、その結果精神内面の自律的自我が、最も収縮した理想の楽園として発見される、という逆説的過程を我々は確認した。しかし、この精神の核心部分の性質を探るためには、更にもう一つの逆説を重ねる必要がある。自律的自我は959行目以降、精神内面の奈落的空間という形を採って再び登場する。⁸

The darkest Pit
Of the profoundest Hell, chaos, night,
Nor aught of [] vacancy scooped out
By help of dreams can breed such fear and awe
As fall upon us often when we look
Into our minds, into the mind of Man,
My haunt and the main region of my song. (984-90)

ここに見られる精神空間は、極度の恐怖を喚起するものであるが故に、ユートピア願望が安住を志向する類いの場ではなく、むしろ反ユートピア的さえあ

内面からの帰郷者

る。ユートピア願望は、ここから外へと後退した所に庇護を求めるであろう。

Beauty, whose living home is the green earth,

 . . . waits upon my steps,
 Pitches her tents before me when I move,
 An hourly Neighbour. (991-96)

引用から読み取れることは、グラスミアの谷に我々が確認してきた母性的庇護者の役割を、ここでは地上の美が引き受けていることである(Kelley 45)。この部分が先の引用の直後に置かれていることからすれば、精神の奈落空間の醸成する恐怖に対抗して、地上の美しい自然が保護者として機能していると考えられる。つまり、ユートピア願望が向かうべき方向は、自律的自我の発見に至るまでの過程とは反対に、精神という小空間から外界へ出る方向に一致しているのである。

984-85行目に見られた地獄への言及が暗示しているように、ここではキリスト教神と、そしてとりわけ Milton の *Paradise Lost* が意識されている。

Fit audience find though few — thus prayed the Bard,
 Holiest of Men. Urania, I shall need
 Thy guidance, or a greater Muse, if such
 Descend to earth or dwell in highest heaven!
 For I must tread on shadowy ground, must sink
 Deep, and aloft ascending, breathe in worlds
 To which the Heaven of heavens is but a veil.
 All strength, all terror, single or in bands,
 That ever was put forth in personal forms —
 Jehovah, with his thunder, and the quire
 Of shouting angels and the empyreal throne —
 I pass them unalarmed. (973-84)

ここでワーズワスは、自分の詩作の企てにはミルトンの詩神ユレイニアよりも更に偉大なる詩神の助力が必要であること、またその過程において至高天よりも更に高い世界へと赴かねばならないことを述べ、偉大なる先行詩人ミルトン

の亜流に陥ることなく独自の文学を構築する宣言を行っている。

キリスト教者一般にとっての絶対神エホヴァと同様、先行詩人ミルトンは、遅れてやって来た詩人ワーズワスにとっての強力な父親像である。自律的精神空間を語る時、二つの代表的父親像が取り上げられ、あえて見下され、否定されているということは、自律的自我の成立には精神分析におけるエディプス・コンプレックスの意味での父親殺しが伴われるということの意味している。自我を生み出すのは自我自身であって、先行して存在する秩序や権威、そしてその象徴である父親像ではないことが、この過程によって主張され、それによってより勝るものの力に自らの存在を脅かされることなく、詩人としての獨創性を発揮しようとしているのである。⁹

セルヴィエの描いたユートピアと千年王国の対立図式では、母性志向のユートピア願望に対して、千年王国主義とは父親像に取って代わり、その命運を反復していく衝動でもあった。父親殺しに伴う「悲劇的有罪性」を抱きつつ、人間は自由意志を持つ個人となり、前進の道を選び取っていくのである。その前途には、勿論無際限の幸福を約束する千年王国の野望がある（セルヴィエ 288-98）。自律的自我の達成は、ユートピア願望がそこから退き自然の美の庇護の下に入ることを求めていたという消極的証拠に加えて、この精神分析的意味からも千年王国的企てであったことが判明する。再び逆説である。『グラスミアの家』に現れた自律的自我は、現実逃避的な退向願望によって発見され、到達されたものであったにもかかわらず、それに続く973行目以降の詩行は、自我自身は革命的かつ前進的な千年王国衝動に基づくものだと述べているのである。

ワーズワスの千年王国主義に、父親殺しの願望とそれに伴う罪悪感が重なることは、千年王国到来の期待が最も高まった時期であるフランス革命時の体験を綴ったテキスト、*The Prelude* の第九巻と第十巻を瞥見することで確認される。¹⁰ Moormanによれば、ワーズワスがフランス革命の大義に心から共鳴し、革命活動に傾倒し始めたのは、恋人 Annette Vallon との出会いと時を同じくしていた(187)。ある意味で既存の体制に反逆することになるが故に許されざる、異邦の女との恋を経て初めて、革命が“A single picture merely” (9.77)以上のものに思え、その真の意義に開眼した気持ちになったことは、ワーズワス

の内的体験としての革命の意味を探る上で重要な手掛かりを与えてくれている。二人の関係は、『序曲』では直接語られることはないが、第九巻の末尾の“Vaudracour and Julia”という伝承の悲恋事件に置き換えられて現れていると考えられる。¹¹ この恋愛物語と、ワーズワス自身の伝記上の恋愛体験を重ね合わせ、そこから彼にとってこの恋愛が持った内的意味を推測すれば、自分とは異なった身分もしくは国籍の女との恋、それが引き起こす父親像に象徴される家父長制度への反逆、そして最終的にはこの制度の強制力への屈服と女性の放棄、という経過になるだろう。ワーズワスの場合、この種の反逆的恋愛と革命への参加が時期的に一致するということは、革命もまた圧迫されていた息子達、すなわち民衆が、王制という家父長的権威、秩序に対して反抗する行為として、すなわちエディプス的ファミリー・ロマンスの性格を持つものとして理解されていることを意味している。¹² 彼にとって、英仏の本格的開戦こそが、初めて真の意味で“A revolution” (10.237)と呼ぶに値する衝撃的経験であったのは、それによって共和制フランスを支持していた彼自身が、祖国、すなわち fatherland たるイギリスとその政体に反逆する息子という明確な革命主義者のアイデンティティを持つことになったからなのである。このとき初めてワーズワスは、自分が Robespierre と同じく “cruel son” (10.461)であることを意識することになった。

この種のエディプス的闘争と自律的自我との関係は、ワーズワスの創造性の源である『序曲』第十一巻の“spots of time” (257)が解明してくれる。第十一巻の最後を飾る第二の「時の点」は、少年時代寄宿していた Hawkshead Grammar School からクリスマス休暇で帰省する際のトラウマ的体験を綴ったものである。最初の場面で少年ワーズワスは学校の近くの岩山に登り、郷里へと連れ帰ってくれる馬車の到着を一日千秋の思いで待っている。次に、帰省を果たした後十日も経たないうちに父親が亡くなったことが述べられる。この二つの出来事は客観的に見れば、互いに何ら関連がないように思えるのだが、ワーズワスにとって父親の死は、帰省を待ち焦がれる欲望に対する神からの懲罰に思えたのである。

The event,
 With all the sorrow which it brought, appeared
 A chastisement; and when I called to mind
 That day so lately past, when from the crag
 I looked in such anxiety of hope,
 With trite reflections of morality,
 Yet in the deepest passion, I bowed low
 To God who thus corrected my desires. (11.367-74)

子供が心に抱く感情としては当然のものと思われる帰省への憧れが、父の死をもって懲罰されるというのは奇妙という他はない。しかし、父の死に対して少年が愛憎両立の感情を抱くことは不思議ではない。最初の場面が再び回想された時、その風景の中に登場する霧は“indisputable shapes” (11.381) という句によって修飾されている。De Selincourt は、この句が *Hamlet* において亡き父王の亡霊を描写した Hamlet の言葉、“a questionable shape” (1.4.43) に由来すると述べている(615)。ワーズワス少年が帰省する前の時点で、父の死を予測でき、風景の中に引喩の形を借りて読み込んだということはあるが、記憶を想起された時点での再構成と考えれば、ワーズワスの抱いていた帰省に対する強い憧れは、父の死の願望から転移された感情が含まれていたと考えられる。帰省を待ち望む意識的願望とそれが矯正されたという自覚は、父殺しの無意識的願望とその実現の際の罪悪感を意味していたのである。¹³

精神の賦活と再生を可能にする「時の点」とは、外界を知覚する感覚作用に対して精神が絶対的支配を及ぼしている状態の謂である。

This efficacious spirit chiefly lurks
 Among those passages of life in which
 We have had deepest feeling that the mind
 Is lord and master, and that outward sense
 Is but the obedient servant of her will. (*Prelude* 11.268-72)

すると少なくとも我々が確認した「時の点」の事例から判明するのは、ワーズワスの内的体験の中では、記憶の中に隠蔽された父親殺しの願望とその罪責感

が、外界に対して絶対的優位状態にある精神への、換言すれば自律的自我への確信の高まりと、完全に同じ位置を占めているということである。この事例に限らず、「時の点」は、直立して出現する恐怖の人物像や未知の存在について語るものだが、それらとの直面を引き起こしているのはワーズワスの側の侵犯や罪悪感である(Paulson 259)。つまり、父親的形象が意味する秩序や制度の禁止を侵犯することが、自意識の発現と強化、及び自我の自律を促しているのである。¹⁴ 言及した「時の点」や、『グラスミアの家』のミルトンを凌駕しようという宣言は、この種の侵犯の中でも最も典型的なものであり、それ故に自律的自我の直接の発現が可能になったのだ。自律的自我は、父親の、すなわち過去の詩人達の影響力の中で、独創性を勝ち得るために闘われるエディプスの闘争を前提とした千年王国的企ての所産だったのである。

しかし、我々はここで、改めてグラスミアの谷を支配していたユートピア願望を考慮しなければならない。『グラスミアの家』において、一方では自律的自我の発見を促したユートピア願望は、詩の終わり近くでは、逆に精神の内面から自然の美という外界に存在する庇護者へ向かう願望として現れていた。フランス革命に代表される暴力的政治革命は放棄されはしたが、それを動機づけていた千年王国主義思想は、内面化されることによってロマン派の思想に対して影響力を及ぼし続けたのであれば、グラスミアの谷において楽園空間を収縮させ、ついには精神の核にまで至らせたユートピア願望のはたらきは、まさにこの革命の内面化という過程を意味していたことになる。しかし、同時に内面化された千年王国衝動からもワーズワスは、その恐怖故に引き下がらざるを得なくなっている。この動きを最後に受け留めるのが地上にある自然の美なのである。『序曲』の数々の「時の点」においても、掻き立てられた恐怖はその後より身近で人間的な美の形象によって馴致され、いわば安全に閉じられている。第一巻のボート盗みの挿話では恐怖の体験の場であった湖は、その直後に置かれたスケート遊びの場面では、永で閉ざされ、スケートで自由自在に模様が描かれ、少年の思うがままになる平面に変えられている。第十一巻の最初の「時の点」では、絞首台と芝地に刻印された殺人者の名前が“visionary dreariness”(310)という危険な感覚を呼び起こしたが、後にワーズワス夫妻とドロシーが同

じ場所を訪れた際、この感情はより人間化された“the spirit of pleasure and youth's golden gleam” (11.322)に昇華されている。¹⁵ 先に論じた第二の「時の点」においても、経験そのものは心の奥底にしまい込まれ、記憶の彼方にその風景を遠望する意識はこちら側、つまり自然の側に確実に立つことによって、トラウマの経験から再生の活力を得ることができたのである。

And I do not doubt
That in this later time, when storm and rain
Beat on my roof at midnight, or by day
When I am in the woods, unknown to me
The workings of my spirit thence are brought. (11.384-88)

ワーズワスの旺盛な詩作活動の舞台であったグラスミアはこの意味で、危険な領域にまで敢えて進もうとする詩人を庇護し導く自然の美の世界でなければならなかった。何故彼が自らの故郷ではない地を、“home”と称してまで讃える詩を書くことになったのかは既に明らかであろう。グラスミアは、千年王国達成という危険な企てからの、外と内の両方向からの撤退を受け容れる「家」という情緒的収斂点であったのだから。

以上の議論から、改めてワーズワスの占める境界者的位置が明らかになった。自然形象の庇護の許へ常に身を預けようとする反動的ユートピア願望が、ワーズワスの千年王国衝動とその所産である自我の自律現象に常に付きまとうということは、自律的自我は成立した瞬間から自然の美という形象に侵犯される運命にあることを意味している。外在的形象の刻印を免れた純粋な精神空間には持続が原理的にあり得ない以上、彼にとって内的世界の開示はあくまでも瞬間であり、それ自身の実体は示されず、ただ開示がなされたという事実のみが残ることになる。¹⁶ とすれば、彼が扱い得るのは自我の発見もしくは生成の過程であり、内的世界を深く探究する途は閉ざされているのだ。ワーズワスが垣間見せてくれたのは、精神が自然を離れ分裂する可能性であり、彼以降のロマン派が経験する自然からの完全な疎外、細分化された内的世界の迷宮への埋没などの現象は、未だ伺い知ることにはできない。¹⁷ それは己の自我の他に自然というも

う一つの家を持ち、その庇護を確信できた詩人のみに許された幸福だったろうか。我々は彼が地上の美に感じた安らぎを、もう一度噛み締めておかねばならない。

Beauty, whose living home is the green earth,

.....

... waits upon my steps,

Pitches her tents before me when I move,

An hourly Neighbour. (*Home* 991-96)

注

本論は、名古屋大学英文学会第31回大会シンポジウム、「ロマン主義はいずこへ」(1992年4月25日、名古屋大学)における口頭発表に基づく。

- 1 この作品は従来、基本的には平穏な田園生活の描写を中心とする詩であるとする見方と、前提と展開に緊張を孕む問題含みの作品とする相反する二つの立場から解釈されてきた。具体的な解釈の事例については Johnston 2-4参照。後者の見解に基づくジョンストンの論文をきっかけとして、以来幾つかの重要な解釈が提示されている。代表的なものに、Clarke、Jonathan Wordsworth, “Visions”、Garber、Schulz、Harding がある。本論における『グラスミアの家』の分析は、特に Garber に多くを負う。
- 2 『グラスミアの家』の引用は特に明記しない限り、1806年に成立した「Bテキスト」(“MS. B”)に拠る。この詩の成立経緯と成立年代、及びB、D二種類の手稿が存在すること、両者の異動の詳細については Darlington の序文と、Jonathan Wordsworth, “On Man, on Nature”参照。
- 3 セルヴィエのユートピア論については、濫澤の解説も参照。
- 4 十八世紀から十九世紀にかけて生きたワーズワスにとって、都市の持つ意義はもはや人間をその庇護の下に守る伝統的都市とは掛け離れたものになっていた。彼の体験の中で近代的都市の範型と考えられるロンドンは、*The Prelude* の第七巻

で次のような否定的な評価をくだされている、“blank confusion . . . An undistinguishable world to men, / The slaves unrespited of low pursuits, / Living amid the same perpetual flow / Of trivial objects, melted and reduced / To one identity by differences / That have no law, no meaning, and no end —”(696-705)。『序曲』からの引用は全て William Wordsworth, *Prelude* の1805年版に基づく。

- 5 セルヴィエによれば、ユートピアの閉鎖性はしばしば島の楽園という形を採って表される(269)。
- 6 以下三段落に渡る『グラスミアの家』における楽園空間の収縮と自律的自我発見の議論は、Garber 195-97に負う。
- 7 精神内面の核心部分に非経験的領域が存在することを主張する先験論の思想が、精神の過去退向の志向と一致することについては、Groß 8-10参照。ワーズワスはその詩的経歴の中で未来志向の進歩主義から過去志向へと、自らの立場を変化させたが、この変化は哲学上の経験論から先験論への変化に相当する、とグローブは主張している。
- 8 959-1048は、改訂を受けた上で、1814年長編哲学詩 *The Recluse* への「序言」(“Prospectus”)として、『グラスミアの家』からは独立して出版された。この部分のロマン主義文学創出の宣言としての意義は Abrams を参照。
- 9 象徴秩序の父親像、あるいは大文字の“the Word” とのエディプスの相克が、ワーズワスの自我中心的独創性の前提であることについては、Weiskel 167-204参照。また、近代詩とその創作の過程を、先行詩人の影響力に対して後代の詩人が挑むエディプスの闘争と見なす「影響の不安」理論については、Bloom 参照。
- 10 ワーズワスの革命体験についての議論は、Paulson 248-75に負う。
- 11 ただしこの挿話は1850年版からは、ほぼ完全に削除されている。
- 12 ポールソンによれば、1790年代の革命文書の中では、自由恋愛そのものが革命の象徴として扱われていた(168)。
- 13 第二の「時の点」に関するここまでの議論は、Weiskel 181-84に負う。更に Paulson 258-59も参照。
- 14 ワーズワスにおける自意識の問題については、Hartman 参照。

内面からの帰郷者

- 15 「時の点」の恐怖がより安全な形に馴致されることについては、Paulson 264-65 参照。ポールソンは崇高と美という対立概念を用いて論じている。
- 16 ワイスケルによれば、ワーズワスにとっての啓示は、此岸と彼方との境界にたゆたう瞬間が存在するのみで、象徴的意味は決して開示しない。この象徴化作用に抵抗する力こそ、ワーズワスが想像力と呼ぶものだという(172-75)。
- 17 自然という支えを失った、ワーズワス以降の後期ロマン派が迷宮的精神空間に閉じ込められていく経緯については、神尾参照。

引用文献

- Abrams, M. H. *Natural Supernaturalism: Tradition and Revolution in Romantic Literature*. 1971. New York: Norton, 1973.
- Bloom, Harold. *The Anxiety of Influence: A Theory of Poetry*. New York: Oxford UP, 1973.
- Clarke, Bruce. "Wordsworth's Departed Swans: Sublimation and Sublimity in *Home at Grasmere*." *Studies in Romanticism* 19 (1980): 355-74.
- Garber, Frederick. "The Landscape of Desire." *The Autonomy of the Self from Richardson to Huysmans*. Princeton: Princeton UP, 1982. 174-202.
- Grob, Alan. *The Philosophic Mind: A Study of Wordsworth's Poetry and Thought, 1797-1805*. Columbus: Ohio State UP, 1973.
- Harding, Anthony John. "Forgetfulness and the Poetic Self in 'Home at Grasmere.'" *Wordsworth Circle* 22 (1991): 109-18.
- Hartman, Geoffrey H. *Wordsworth's Poetry, 1787-1814*. 1964. New Haven: Yale UP, 1971.
- Johnston, Kenneth R. "Home at Grasmere': Reclusive Song." *Studies in Romanticism* 14 (1975): 1-28.
- 神尾美津雄「阿片と闇のラビリンス——キーツ、コールリッジ、そしてデ・クインシー——」『闇、飛翔、そして精神の奈落——イギリス古典主義からロマン主義へ——』英宝社、1989年、362-410。

- Kelley, Theresa. *Wordsworth's Revisionary Aesthetics*. Cambridge: Cambridge UP, 1988.
- Lindenberger, Herbert. *On Wordsworth's Prelude*. Princeton: Princeton UP, 1963.
- Moorman, Mary. *William Wordsworth: A Biography; The Early Years, 1770-1803*. Oxford: Clarendon, 1957.
- Paulson, Ronald. *Representations of Revolution (1789-1820)*. New Haven: Yale UP, 1983.
- Schulz, Max Ford. "Wordsworth and the *Axis Mundi* of Grasmere." *Paradise Preserved: Recreations of Eden in Eighteenth- and Nineteenth-Century England*. Cambridge: Cambridge UP, 1985. 83-96.
- Selincourt, Ernest de, ed. *The Prelude: Or Growth of a Poet's Mind*. 2nd ed. by Helen Darbishire. Oxford: Clarendon, 1959.
- ジャン・セルヴィエ 『ユートピアの歴史』 朝倉剛、篠田浩一郎訳、筑摩書房、1972年。
- Shakespeare, William. *The Tragedy of Hamlet, Prince of Denmark*. *The Riverside Shakespeare*. Ed. G. Blakemore Evans. Boston: Houghton, 1974. 1141-97.
- 澁澤龍彦 「ユートピアと千年王国の逆説」『黄金時代』 1971年、筑摩書房、1986年、46-62。
- Tuveson, Ernest Lee. "Millenarianism." *The Dictionary of the History of Ideas*. Ed. Philip P. Wiener. Vol. 3. New York: Scribner, 1973. 223-25.
- Weiskel, Thomas. *The Romantic Sublime: Studies in the Structure and Psychology of Transcendence*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1976.
- Wordsworth, Jonathan. "On Man, on Nature, and on Human Life." *Review of English Studies* ns 31 (1980): 17-29.
- . "Visions of Paradise: Spring 1800." *William Wordsworth: The Borders of Vision*. 1982. Oxford: Clarendon, 1984. 98-148.
- Wordsworth, William. *Home at Grasmere: Part First, Book First of The Recluse*. Ed. Beth Darlington. 1977. Ithaca: Cornell UP, 1989.
- . *The Prelude, 1799, 1805, 1850*. Ed. Jonathan Wordsworth, M. H. Abrams,

and Stephen Gill. New York: Norton, 1979.

Synopsis

Homecoming from Within:
The Autonomous Self and Its Destiny in *Home at Grasmere*
By Ichiro Koguchi

William Wordsworth's *Home at Grasmere* gives the moment when the poet discovers his autonomous self while recounting its primary theme of paradisaical redemption. This paper discusses the nature of the Wordsworthian autonomous self by referring to its genetic process in the poem and attempts to define the position the self has in English Romantic literature.

The poem is motivated by two conflicting psychic drives, regressive and progressive, which we call "Utopian wish" and "millenarian drive" respectively, based on the theory Jean Servier expounds in *Histoire de l'utopie*. The professed movement of the poem, millenarian in its nature and aiming at spreading the bliss of Grasmere through the whole world, is counteracted by Utopian wish to retrograde into a metaphorical womb; the paradisaical sphere Wordsworth can be confident of contracts as this dialectic is gradually dominated by Utopian wish, until he finds a core in his mind to be the only possible paradise, which is independent of natural background and can never be touched by others than himself. We call this mental core "autonomous self."

The autonomous self is apparently marked by Utopian wish from this genetic point of view; however, when it reappears in the end of the poem, it has lost its Utopian character and is presented as an awe-inspiring mental abyss from which Utopian wish would withdraw. The reappearance is accompanied by the poet's words of denial to influence from father figures such as Christian God or Milton, one of the most influential precursor poets for him. Servier also defines millenarianism the son's will to depose and replace the father figure which symbolizes

patriarchal ruling order; hence paradoxically the autonomous self itself has to be regarded as a millenarian product.

In the 1805 version of *The Prelude*, this oedipal patricidal wish coincides with millenarianism in two episodes during the French Revolution: one is the story of “Vaudracour and Julia” into which the poet’s love affair with Annette Vallon is displaced, and the other is England’s full-scale war against France. Both of these events are felt to be the most revolutionary or millenarian in his experience; for he is thrown into places where he is forced to realize that he is a revolting son against patriarchal order or his fatherland. The second of the “spots of time” is a testimony that an oedipal battle leads to the self’s autonomy. Here young Wordsworth’s unconscious ambivalence with his father’s death is displaced into his conscious desire to go home, and as the text says, this kind of experience concurs with the moment when the poet feels absolute dominance of his mind over outward sense, which we can rephrase as the self’s autonomy.

However, the autonomy is qualified by Utopian wish. When we recall in *Home at Grasmere* the poet withdraws into the beautiful of nature faced with the apocalyptic terror the naked self provokes, it turns out that Grasmere is a Utopian convergent point where the poet takes refuge both from the world outside and the mind inside. This implies the Wordsworthian autonomous self cannot have duration in existence since it cannot retain its pure state being destined to be contaminated by external natural imagery any moment after its birth. Wordsworth’s border situation between nature and the self distinguishes him from the later Romantics, whose minds are alienated from nature and fated to be imprisoned in their own internal labyrinths.